

〈修士論文要旨〉

縄文時代早期末～前期初頭土器群の広域比較

横 澤 慈*

本論は、縄文時代早期末～前期初頭の地域間関係の把握を目的とする。この時期はそれまでの広域的な土器分布が崩壊し、地域的な土器型式が成立した時期である。そのため、各地域間の関係性把握が重要になってくる。よって本論では地域間関係解明の基礎作業として、広域編年の構築を試みる。

地域間関係の上では、基本となる編年が必要である。本稿では東海編年を基準として、おもに南関東から中部高地南部にかけての編年構築を行なう。東海編年を使うメリットは、以下のとおりである。

1. 編年の大枠が層位的に確認されている。
2. 東海にとどまらず、関東や中部高地、北陸でも出土することから、広域編年のうえで鍵となる。

本稿では埼玉県、東京都、神奈川県、山梨県、長野県、静岡県、愛知県、岐阜県の28遺跡を対象とした。遺構は住居跡を中心とした。住居は切り合い関係から前後関係を想定できる点でも有利である。

本論第IV章では、各事例について示した。ここで基準となる土器型式を元に、各遺構を整理したものが表1・2である。

第V章ではこの表をもとにして、東海編年と在土器の編年関係のすり合わせを試みた。その結果が表3の編年表である。

今回の編年表では、東海系土器に対して在土の土器がきれいに横に並ばず、梯子状にずれて並ぶ結果となった。しかし、時間的に各地域の土器型式が等しく同じ時間幅をもつはずはなく、それが土器型式の実態を示しているのかもしれない。

本論の目的であった、地域間関係についての考察は一切できなかった。しかし、まずは広域編年の素描を示せたことで、目的解明のための第1歩は踏み出せたものと思う。

今後の課題としては、各土器型式の成立や消長を踏まえての編年の確立であろう。そして、その中からまずは狭い地域での関係把握を行ない、さらに広域へと広げなければならない。